

『講義 仕事と人生』ができるまで

井上 雅雄

はじめに

私は、昨2008年5月にキャリアセンターとともに『講義 仕事と人生』という全カリ総合Bで展開している講義の内容を出講者の協力を得て取りまとめ、新曜社から出版した。ここでは、編集部求めに応じて講座開設の意図とこの書籍の出版にいたった経緯および出版後の反響について、記しておくたい。

1. 講座開設の経緯

前回1997年の金融危機以降深刻化した新規学卒者の厳しい就職状況、いわゆる就職氷河期という環境条件の下で、就職部（現キャリアセンター）の依頼を受け全カリ総合Bの一つとして「仕事と人生」が開設されたのは、2000年のことであった。この講座は、大学におけるキャリア教育の事実上はじめての試みとして、社会的な注目を集め、新聞や雑誌の取材が行なわれたが、このこともあってそれから数年の間には各大学が似たような講座を開設し、大学の場でのキャリア教育が一種のブームとなって定着した。この講座開設の背景には、就職状況が厳しいにもかかわらず大卒新入社員のおよそ3分の1が3年以内に離職するという、今日ではよく知られている事態の進展があり、在学中に学生の職業意識や仕事への関心を高める必要があると認識されたことにあるが、それとともに良好な雇用機会を得られないままにフリーターや

ニートなどに滞留する若者が層として発生し、いわゆる若年雇用問題が社会大に広がったという現実があった。

今日では、学生の就職活動について、彼らが就活マニュアルで身を固め画一的な面接テクニックを駆使する現象を「就活のパカヤロー」などと嘲笑されるほどになってしまったが、しかし学生にとってどのような企業に入り、いかなる仕事に就くかは、依然人生の重大な選択としてその重要性はいささかも低下していない。むしろ新規学卒者を最も重視するという日本企業の採用慣行は、中途採用が一般化した今日であってもほとんど揺らがないばかりか、学生にとってはそれに失敗したならば正規社員への道が大幅に狭まるという現実のなかで、就職活動の重要性は一層高まっているとあってよい。大学が教育機関として学生に「付加価値」をつけ彼らの能力を高めていく責務を負っている以上、そこに職業や仕事にかかわる基本的な情報の提供とそれによる職業意識の形成が求められることは不可避である。しかも経済のグローバル化による競争条件の激化のなかで、企業が丹念で長期にわたる職場での教育訓練を負担と意識し、職業スキルの形成とキャリア管理を次第に従業員の責任に委ねつつあるというここ数年に顕在化した雇用管理の変化も、大学の教育のあり方に変革を迫る一要因であった。

とはいえ、大学は教育機関ではあるが、直ちに職業訓練の場ではありえない。むろん短大も含めた大学進学率が

5割となった今日の大学が、理念的にも実際的にもかつての大学像と同じではありえないけれど、しかし大学の基本的機能が知の創造と伝承を通ずる人間知性の陶冶にあること自体には、変わりがない。この機能を失ったならば、大学は自らの存在根拠を掘り崩すことになるからである。ホワイトカラー・ワークの基本が、不確実な状況下での、物事の本質を見抜く洞察力、情報の選別とその意味・射程の読解力、新たな政策の創造力あるいはパラダイム転換を作り出す構想力を要件としていることは、何よりもそれを立証する。これらの力は、仕事に必須のスキルやノウハウを最終的に担保する源泉であり、それは迂遠ながら大学教育を貫くりベラルアーツによってしか形成されえない性格のものである。

それゆえに講義「仕事と人生」も、職業的スキルの形成に直結するようなものとしてではなく、雇用と仕事と生活の文脈においてエセンシャルな最先端の研究の成果を、当該分野の代表的な研究者を通して、いまを生きる若者への強いメッセージとともに伝えるものとして構想され、実践されたのであった。

2. 出版の経緯

以上のような経緯によって開設された「仕事と人生」は、開講1年後にある出版社からキャリアセンターを通して講義内容の出版を打診された。が、当時はこの講義自体がお模索的な段階を出ていないだけでなく、私自身新しい分野の研究に着手したばかりでおおよそそのような要請に応える余裕がなかった。しかも私は研究者として専門の研究書は書いても、テキストブックや入門書については執筆や出版することを意識的に避けてきたという経緯

がある。専門分野によってむしろ異なるであろうが、少なくとも私たちが生きてきた研究の世界においては、誤解をおそれずにいえば、テキストブックは多くの専門書を書き上げ、当該分野のすべてに精通している作家しか書いてはならないという不文律のような伝統があったから、私は、教育上の必要性は感じながらも、それを執筆するという気持にはなれなかったのである。それは、先達から継承してきた私たちの研究者としての矜持の基盤をなすものであったけれど、しかしこのような態度は、観点を変えれば守旧的な研究者の典型のようであったかもしれない。

2007年の初頭、私は新たに取り組んできた研究を取りまとめて気持に余裕ができた一方、講義「仕事と人生」はキャリアセンターを中心に多くの人のサポートを得てすでに7年を経過し、試みの期間をひとまずは終えた。2000年代半ばに入ってから就職状況の好転を受け、一見キャリア教育の緊要性は薄らいだかのようにみえたものの、仕事をめぐる状況そのものは、非正規雇用の激増や正社員の過大な労働負荷あるいは若者の人生そのものに対する深い懐疑の拡がりなど総じて社会の流動化現象を映し出してむしろ一層不透明感が強くなったことは否定できなかった。私は、教育上の必要性という直接的な理由ばかりではなく、こうした現実に対して少なくとも雇用や仕事についての確な認識を提示し、それを通して仕事と人生について何ほどこかのメッセージを送ることができないかとの願いから、キャリアセンターと相談して講義をベースとしたテキストブックを編むこととし、出版社の了承を得たのであった。

2007年度の講義は、講座開設以来はじめて後期に設定したこともあり受講生が例年より少なく講義の緊密度の高

いことが見込まれたため、このライブの講義をベースにテキストブックをまとめたいという意向を予め出講の講師に告げ、その快諾を得て講義がはじまった。各回の講義は質疑時間を除いておよそ80分強であったから、その講義テープをキャリアセンターの協力のもとに活字に起こすと、本の販売価格から割り出した一講義当りの予定枚数の3倍近くになる。そこで出講者に講義内容のエッセンスを軸とした刈り込みと再構成を要請したが、なかには多忙等で内容のカットをはじめ必要な加筆をすべて私が委ねられる場合もあり、また講義自体はともかくも流れていくが活字にすると全体とのバランスが悪いために、私をはじめから執筆しなおすすめ場合もあった。あるいはできるだけレベルの高い内容を織り込むために、1～2年前の講義に差し替えるという操作も適宜行なった。その上で出講者が圧縮した原稿をチェックし、さらに必要な手を加え、全体を調整して『講義 仕事と人生』ができ上がったのである。全12講のうち研究者だけではなく企業の人事担当者の二つの講義と立大学院前理事長の過年度の講義を織り込んだのは、企業の現場における仕事の実践と経験を広いパースペクティブのもとに描き出したいという意図による。

3. 出版の反響

こうして刊行された『講義 仕事と人生』は、当然にも授業のテキストブックとして活用するとともに、各大学の書籍部をはじめとして一般書店で販売されたから、本学の学生のみならず他大学の就職関係者や学生もまた購入したという。出版を担当した新曜社によれば、千数百部が昨年末までに販売された。出版後、私に寄せられた感想として印象的であったのは、講義内容の



多彩さとレベルの高さを評価する声とともに小宮山昭一立大学院前理事長の講義「仕事と自己実現—私の経験—」(第12講)が、失敗をも含む仕事に対しての様々な努力が人生に輝きを与えていくというメッセージとして示唆的だとする反響が多かったことである。

その上で、この書物の隠れた成果は、じつは高校の教育現場で一定の注目を集めたことにある。最近よく耳にする大学でのキャリア教育とは具体的にどのようなものなのか、どのような内容によって構成されているのかよく分からない、というのが高校教員の実際の意識であったが、『講義 仕事と人生』を読んでみてその内容がよくわかるとともに自分にとっても大いに勉強になったという感想が寄せられ、総じて好感をもって受け止められた。この点から言えば、本書はテキストブックとして活用されているだけではなく、ごく一部ではあれ本学の教育実践をともかくも社会に広報する役割を果たしていることになり、それは編者にとっては望外の喜びであった。

おわりに

経済の動向と技術の進展によって企業の雇用管理・採用政策は変動するの

が常であり、それはまた当然にも働く人びとの雇用と仕事と生活の内容に変化をもたらす。この変化常なる環境条件に教育がどのように対応していくかは、大学にとってはその盛衰にかかわる重大な課題をなす。私がキャリアセンターとともに編んだ本書は、そうした課題に対するささやかな応答であり、現在各学部の専門課程で試みられている、より高度なキャリア教育のベースをなすものとして活用していただきたいと願っている。

いのうえ まさお
(本学経済学部教授)